

パレスチナ赤新月社医療支援事業（ガザ地区）

救急部看護師 藤原 真由

派遣期間：2020年1月10日～3月9日

派遣地：パレスチナ・ガザ地区

ガザ地区は1948年に多数のパレスチナ人が戦禍を逃れて流入した地域で、面積は約360平方キロ、人口は200万人強とされていますが、イスラエルにより、住民は地区外への移動が厳しく制限されています。

医療を取り巻く環境で問題となっているのは、物流の制限による医療資源の不足、人の移動制限による医療知識や技術の更新の機会が乏しいことです。医療資源については、MRIの設備は整っていても、ヘリウムが納品されないので実際には撮影ができなかったり、胃潰瘍を疑っても、容易に内視鏡検査ができない状況などが生じています。また、医療知識の更新についても、卒後教育のシステムが整っていないことから、研修が十分に行われていない、保健省からプロトコルが提供されたとしても、その周知がしにくい状況を招いています。また医療者も、学校で学んだ知識・技術を実践しようにも、物理的な理由・システムの理由により実施するのが困難となっています。

当院では、日本赤十字社本社などとともに、2016年秋からパレスチナ赤新月社と共にガザ地区の医療状況の調査を2度行い、2019年10月からガザシティにあるアルクッズ病院でパレスチナ赤新月社医療支援事業を開始しました。当事業では、パレスチナ赤新月社の病院で統一した診療指針（プロトコル）を作成し、それに基づいたトレーニングを整備することを目的とし、看護部門ではプロトコル作成を通して、看護ケアに関わる知識・技術の向上を目指しました。

活動は日本人チームがチームリーダー1名、医師1名、看護師1名、ガザスタッフが事務1名、アシスタント1名で計5名です。この事業メンバーに加えて、病院の幹部（院長、看護部長）、各部門のマネジャー



活動地であるアル・クッズ病院



病院幹部スタッフと運営会

(診療部長、救急部長、各師長など)にも参加してもらうことで、プロトコルが病院の状況や背景に応じたものとする、プロトコルに対する主体性と責任感を持ってもらえるように関わりました。プロトコル作成にあたっては、医師・看護師それぞれにプロトコルワーキンググループを作成し、ワーキンググループメンバーと毎週の会議で議論を交わしながら、プロトコルを



完成させてきました。この際、日赤要員はあくまでも技術的サポートという役割で、作成担当はアルクッズ病院のワーキンググループメンバーという姿勢を貫きました。このようにすることで、先に述べたプロコルへの主体性と責任感に加えて、自身が直面している問題への解決手法をお伝えしたかったからです。事業はいずれ終了しますが、教育システムやプロトコルの更新は継続していかなければなりません。事業終了後ガザスタッフだけになったときにも続けていくための仕組みの種を事業開始時から植えておく必要があるためです。

事業はまだ始まったばかりで、試行錯誤を繰り返しながらガザスタッフと事業を進めております。これからも日本赤十字社は支援を続け、病院の診療、看護知識・技術の向上を通じて、ガザ地区内の住民の健康の維持・改善へ貢献してまいります。皆様のご理解・ご協力に感謝いたします。